



日本の伝統芸能一家に生まれ育った中村滉己と中村卓也の2人がタッグを組んで新プロジェクトを始動。1月19日(日)には、きらりホールにて津軽三味線・民謡リサイタル「ROCKGEN -六弦-」を開催します。2人はどのような想いでステージに向かうのか、お話を聞きました。



ROCKGEN-六弦-はどんなプロジェクトなのでしょう

滉己 このプロジェクトでの2人のミッションの1つは、まず先人から伝わってきた伝統を守ること。そして、もう1つのミッションが、その伝統を2人で見つめなおして、伝統の継承者から開拓者になっていくことです。もっと進化させて、次の世代に伝えていくことを、六弦ではやっていきたいと考えています。



中村滉己

卓也 僕らがやっていくことが、若い世代が聴いてくれる入口になっていきたいですね。「六弦を聴いて、津軽三味線を聴くようになったんです」って言ってもらえるように。やっぱり、おじいちゃんおばあちゃんの世代が聴くものっていうイメージがあると思うんですよ。そこを、若さで演奏する曲とかいろんなジャンルの音楽に挑戦して、この世界ってこんなにカッコいいんだぜ、っていうサウンドを作れるようになりたいです。

同じ中村姓ですがご兄弟ではないんですよね。それぞれ、どんなきっかけで津軽三味線を始められたのでしょうか。

滉己 僕の家は民謡の家系だったので、気付いたら小さい頃から民謡も三味線もやっていたんですが、はっきりと面白さを自覚したのは小学3年生のとき。楽器が上手いって、フレーズを何個も使えることだと思っていたんですが、祖父から「これを聞いて勉強したほうがいい」と渡された音源が、木田林松栄先生の演奏でした。使っている音は6音くらいしかないシンプルな演奏なのに、なぜか鳥肌が立って…津軽三味線の奥深さに触れて、その面白さを自覚した瞬間でした。

卓也 家が和楽器のお店だったので、小さい頃からちょっと箏を触ってみたり、太鼓を叩いてみたり…今考えると贅沢ですが、すぐ飽きるのでも「お前は1つを長く練習しろ」とよく言われていました。それで小学5年生の頃、祖父から古いカセットを渡されて聴いたのが高橋竹山先生の演奏でしたもう、途中で雷を打たれたようにビビッと来て、「俺、これをやりたい！」って言ったん

です。次の日、僕の部屋に津軽三味線がポンと置いてあって、そこからはずっと津軽三味線に夢中です。あの衝撃は忘れられないですね。

そんなお2人が考える、津軽三味線の魅力とは？

滉己 やっぱ日本人であることを思い出させてくれるような力強い音色と演奏スタイルが、津軽三味線の魅力ですね。日本人のDNAを刺激するような音だと思います。

卓也 津軽三味線には、1で驚かせて、2で聴かせて、3で流す、という言葉があります。弦は3本しかないのに、いろんな表現が出来て、まったく別の音楽のようになってしまう表現の幅がある。だから聴いていて飽きないし、そこが本当に魅力的だと思います。あと、叩くという奏法ができるのも、あの棹の太さ、革の厚さがあるからこそできるスタイルだと思いますね。



滉己 津軽三味線ってやっぱり性格が出るんですよ。志は一緒だけど、内面は違っていると言うか。例えば、卓也くんが勢いでパーッと行く感じだったら、僕が丸く受け入れる感じの演奏になったり、その逆になる日もあったり。個人の性格もそうだし、コンディションや気分によっても、引っ張っていく側と受け止める側みたいなのが変わってくる。それぞれに得意なパートもあるんですよ。僕は比較的3の流すパートが得意なんですけど、卓也くんはどちらかと言うと1なんじゃないかな？

卓也 そうかも？ 一緒に練習しているときも「それ、どうやって弾いてるの？」ってなることがあるんですよ(笑)。僕らは六弦だけじゃなくて、それぞれ個人でも演奏活動をしているので、個人でやってきたことを2人で一緒にやるときに答え合わせをしているような感覚もあります。こういうの覚えできたんだけど、どうですか？って、お互いによくやるんですよ。

滉己 僕の中では、卓也くんは打楽器的な奏法がすごく得意なイメージ。隣で聴いていると、すごく“来る”んですよ。僕もまだまだ勉強しなきゃと思わされます。かと思うと、その力強さから一転、すごく優しく、小さく弾くんですね。そのギャップがすごく大きい、レンジが広いプレイヤーです。

卓也 褒められると、照れくさいなあ(笑)。僕から見た滉己くんは、それこそ三味線の先輩。ずっと安心して弾き続けられるんですよ。そして、新しい曲やフレーズを自分で作っていきける人なんですよ。ひたむきに作ったものを、大会やコンサートでポロッと出して、何でこんな手が思いつくんだろう？って聴きながら思っていました。最近もずっと車で聴きながら、めちゃくちゃ刺激もらってます。津軽三味線ってやっぱりいい、って思わせてくれますね。

滉己 お互いにライバルだからこそ、リスペクトしています。

最後にリサイタルの聴きどころを少し教えてください。

卓也 宮城道雄先生の箏曲「春の海」はやらせていただきます。お正月によく耳にする曲ですが、もともとは正月のための曲ではないんですよ。先生が広島・鞆の浦の海を見て作った曲が、たまたま正月の雰囲気合っていたというだけなので、僕らはお正月以外にもよく演奏しています。私が津軽三味線用に編曲したんですが、弦が13本ある箏曲を弦3本の三味線で演奏するにあたって、どこを取って、どこを崩さずに弾くか、非常にバランスが難しかったです。この曲はお互いのソロもないので、2人の音がしっかりと重なるところを聴いていただきたいと思います。



中村卓也

滉己 アストル・ピアソラの代名詞ともいえる1曲「リベルタンゴ」を津軽三味線で演奏します。津軽三味線の叩く弾くという概念を一度消して、ありとあらゆる奏法を混ぜ込んでいます。曲調も、ピアソラでありながら少し和の要素を感じていただけるフレーズが入ってきます。そして、2人の性格がよくわかるソロ回しもありますので、ぜひ楽しんで聴いてください。

中村 滉己 (なかむら こうき) Koki Nakamura / 津軽三味線奏者・民謡歌手
民謡一家に生まれ、津軽三味線世界大会優勝の若き名手。大伯父は津軽民謡の名人初代中村隆志、祖父はその弟中村優利、母は民謡民舞全国大会で内閣総理大臣賞を受賞した中村優美、といった民謡一家に生まれ育つ。日本各地に伝わる民謡を、中村滉己の感性で、今の時代にあわせアップデート&リメイクし、世界に発信する活動を展開。先代の巨匠達が紡いできた伝統を継承しつつ、様々な音楽分野との融合を通し、津軽三味線・民謡の可能性を追求している。

中村 卓也 (なかむら たくや) Takuya Nakamura / 津軽三味線奏者
沖縄の伝統芸能「エイサー」を一歳より始め一歳半で初舞台に立つ。三味線、和太鼓を祖父中村泰三に師事。平成28年より民謡鳴り物・美鵬流噺子方家元美鵬直三朗氏に師事。平成29年より、津軽三味線を三絃小田島流二代目小田島徳旺氏に師事。全国に活動の幅を広げ、滋賀県で開かれた全国大会で初優勝した。翌年には、全国規模の大会で高校生の部や大人を含む一般の部に出場し、相次いで制覇した。本来の民謡、古典芸能の追及はもちろんのこと、幅広い世代に三味線の魅力を伝えるべく、津軽三味線の可能性を追い求める孤高の若き津軽三味線奏者。